

英吉利法律学校の設立広告で明言しているように、英米法に関する書籍を収集し、充実した法律書庫を設立することは、本学設置の重要な目的の一つであった。

その基本目的に従って一八八五（明治十八）年九月十日の英吉利法律学校開校以後、法律書庫の充実がはかられ、一九二八（昭和三）年には、末松文庫・岡野文庫・菊池文庫・穂積文庫・カーネギー文庫などの記念文庫を含む、四万四、六〇〇冊余の書籍が図書館に備え置かれたと、『中央大学々報』第一巻第一号は報じている。

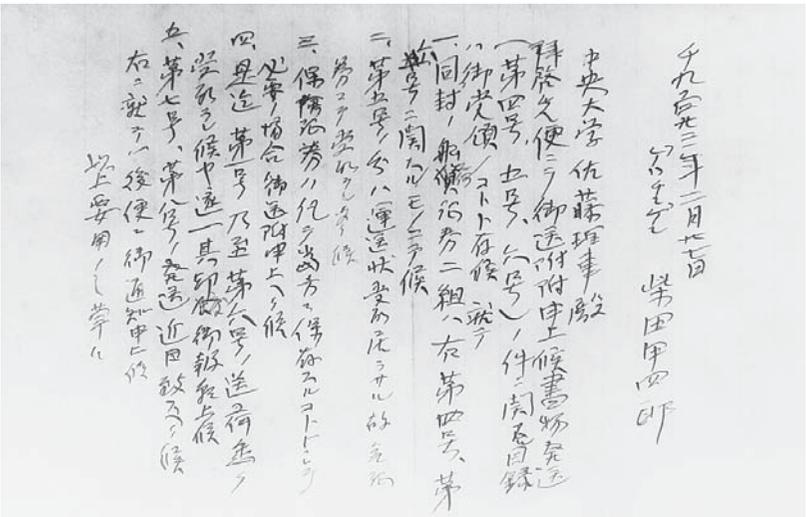
これは一見すると創立以来四十数年をかけて地道に図書を収集した結果と映るかもしれないが、実際には一七（大正六）年六月の校舎内失火によって、ほとんどすべての蔵書が灰燼に帰しているため、四万四、六〇〇冊余の書籍はその後一〇年ほどの短期間のうちに集中的に収集されたものであることがわかる。

丸善や三省堂といった大手の書店を通じて法学関係の

原書や法学・経済学・商学に関する専門書などを精力的に購入したり、教職員・学員が熱心に各種図書を寄贈してくれた結果、多数の図書が収集できたのであるが、それ以外にも留学生を通じて現地で原書・専門書・雑誌を購入させるといった方法もとられていたようだ。

のちに本学の総長まで務める柴田甲四郎は、中央大学卒業から三年後の二〇年十二月、三年間のドイツ留学を命じられた。柴田は二一年四月から一年間ベルリン大学で、続く二年間はゲッチンゲン大学とともに民法・法理学を研究し、二四年三月のゲッチンゲン大学卒業後に帰国した。この留学中に、当時本学の理事であった佐藤正之に宛てて、書簡・購入図書目録・船荷証書などを送付しているのである。

これらの史料によると、ゲッチンゲン大学在学中の二二年六月から翌年の四月までの間、現地で購入した図書を九回にわたって佐藤理事のもとへ送っていたことが



柴田甲四郎より佐藤正之理事への書簡

わかる。一回で一〜四箱ほど送り、購入図書の総冊数は二千冊近くにまでのぼったようだ。

柴田の書簡にはドイツでの図書購入をめぐる苦心について、「第二ノ目録中雑誌殊ニ経済雑誌ハ驚クヘク高価ナルコト（例ヘハ老雑誌日本金ニテ五百円ニ相当スルモノアリ然ラサルモノモ一雑誌大概百円位ハ要ス）而モ雑誌ヲ手ニ入レルコトハ非常ニ困難ニ付、多少ノ犠牲ヲ払フモ図書館ニ欠クヘカラサルモノハ購入スル方針ナルコト全部ニテ三千円位ノ範囲ニテ購入シタキコト（純粹本代ニテ其他ノ費用ハ外ナリ）而モコハ独乙人カ買ヒ得ルト同様ノ値段ニシテ他ニ正規ノ外国行相場ヲ科セラルレハ大変ナレハ頗ル苦心ヲ要ス」と伝えている。

二〇年四月、大学令による中央大学の設立を認可されて以後、研究・教育面の充実にもない環境・施設の整備が急速に推進され、それに対応して研究図書の収集も精力的に行われた。一七年の図書焼失以後、図書購入については海外留学生もその一翼を担い、大きな役割を果たしていたのである。